

国際理論研究におけるパワー概念の 「アメリカ的受容」(2)

— パワー論をめぐる7潮流 —

赤 坂 一 念

はじめに

1. 「アメリカ的受容」をめぐる概念的アプローチ
 - (1) パワー概念の論争的性格と「概念分析」の意義
 - (2) パワー論を類型化する上での留意点
2. パワー論をめぐる7潮流
 - (1) 立場A (集団安全保障擁護論)
 - (2) 立場B (デモクラシー擁護論)
 - (3) 立場C (政策科学論)
 - (4) 立場D (国内問題優先論)
 - (5) 立場E (折衷論)
 - (6) 立場F (国家安全保障論)
 - (7) 立場G (勢力均衡擁護論)

おわりに

はじめに

本研究は、拙稿における先行研究との4つの「対話」の中で指摘したように¹⁾、(1)戦前と戦後の有機的連関性、(2)論争のダイナミズム、(3)隣接諸科学からの知的インパクト、(4)アメリカの政治的伝統と大陸ヨーロッパ的なそれとの知的接触に関心を払うべきである、という筆者の問題関心にしたがって、国際理論研究におけるパワー概念の「アメリカ的受容」の意味と問題点を解明するものである。

本稿は、筆者のこうした問題関心を包摂するものとして、戦間期から第二次世界大戦直後にかけてなされたパワー論の登場という現象に注目することによって、この時期のアメリカ国際理論研究におけるパワー概念をめぐる覚醒・受容状況を類型化し、その多元的性格とその相関性を確認することを目的としている。

1. 「アメリカ的受容」をめぐる概念的アプローチ

(1) パワー概念の論争的性格と「概念分析」の意義

周知のように、パワー概念は、政治学のみならず、国際理論研究における最も根本的で重要な中心概念のひとつであるとのコンセンサスが得られている一方で、その位置づけは極めて多岐に及んでいる。

例えば、ストール (Richard J. Stoll) およびウォード (Michael D. Ward) の指摘によれば、パワー概念は「現実主義者の理論化においてだけでなく、世界を相互依存あるいは従属といったレンズを通して見る研究者の理論化においても中心的かつ不可欠な役割」を果たしており、「幅広く多様なアプローチを採用する世界政治学の研究者にとって、非常に重要なものであった」とされる。彼らは、このようにパワー概念の意義を強調した上で、「パワー研究は、たえず世界政治学の研究の中心であったし、これからもそうであろう」と結論している²⁾。このようにアメリカ国際理論研究において、アプローチを異にする研究者たちによってパワー概念が共有されてきたという同様の指摘は、例えば、サリヴァン (Michael P. Sullivan)³⁾ やロスゲッブ (John M. Rothgeb, Jr)⁴⁾ にも見られる。

このような学問的状况を象徴的に述べるならば、国際理論研究の分析対象が何よりもパワー現象であり、それゆえに、この学問が今日に至るまで「パワーの科学」であることを物語っているといえる。ここで我々は、(1) 現実の世界においてパワーなるものが顕著な役割を果たしているという研究者間の現実認識の共有、(2) パワー概念に対する関心の高さ、(3) パワー概念の論争的性格、(4) そして何よりも研究対象としてのその深遠さ、をあらためて確認することができる。もちろん、このように政治の概念規定をめぐる様々な立場が存在しているということは、いうまでもないことである。パワー概念もその例外ではなく、これまでに様々な意味づけがなされてきた。中心概念であるがゆえの宿命ともいえるパワー概念の論争的性格については、一般に広く知られるところである。

それでは、このようなパワー概念の論争的性格は、パワー概念の「アメリカ的受容」の意味と問題点を明らかにする上で障害となるであろうか。筆者は、むしろ有意義なものであると考えている。この点に関して、筆者と同様のアプローチを展開する先行研究としては、例えば、サリヴァン (Dennis G. Sullivan)、ゴールドマン (Kjell Goldman)、ボールドウィン (David A. Baldwin) のものが挙げられる。

このうち、サリヴァンは、パワー概念の定義上の多様性に注目し、1963年の博士学位論文において、アメリカで使用されている国際関係論の教科書を調査した結果、パワー概念には17通りの異なった定義が存在していることを明らかにしている⁵⁾。

このようにパワー概念のターミノロジー上の論争的性格を精査する同様の試みは、ゴールドマンの1977年論文によってもなされている。ゴールドマンは、国際理論研究におけるパワー概念を、行使、所有、構造、基盤の4範疇に分類し、それぞれの範疇の中で各研究者の定義の相違を類型化している⁶⁾。

さらにボールドウィンは、1979年と80年の2論文⁷⁾において、この概念のターミノロジー上の論争的性格を考証するだけにとどまらず、この概念をめぐる一連の論争状況、つまりパワー論争に注目することによって、戦後とくに50年代以降のアメリカ国際理論研究の再検討を試みている。

本研究における最大の特徴もここにある。筆者の分析手法は、ボールドウィンがいうところの「概念分析」により近いものである。そのアプローチは、パワー概念の論争的性格に着目し、パワー概念に嚮導概念としての役割を付与することによって、パワー論が発現しているコンテクスト（文脈）を精査し、アメリカ国際理論研究におけるパワー概念の受容状況を確認するというものである⁹。それは具体的には、パワー概念の意義をめぐる各研究者の認識の相違を、いわば「引照基準」ないし「識別基準」として使用することによって、パワー論争を時代を追って確認していくというアイデアである。

このように各研究者のパワー概念に対する認識の相違に注目することによってパワー論争の整理を試みるという分析手法は、実質的に、概念レベルからアメリカ国際理論の研究動向を再検討することをも意味している。筆者は、この分析手法が、「パワー概念のアメリカ的受容」へと至るプロセスを明らかにするだけでなく、各研究者の理論体系に見られる共通点・相違点、さらにはアメリカ国際理論研究の位相とその変遷を浮き彫りにするための有益な切り口を提供するものであると考えている。

(2) パワー論を類型化する上での留意点

筆者は、このような概念分析を進めるにあたって、次の点に留意しながら議論を進めていきたい。

まず第1は、パワー論そのものに対する関心である。すなわち、パワー概念を用いた体系的な議論を意味するパワー論が展開されるコンテクスト、「パワー」の定義、研究者の理論体系の中に占めるパワー概念の重要性の度合い、あるいはパワー概念の意義に向けられた研究者の期待に対する関心がそれである。とりわけ、パワー概念を用いた体系的な議論を意味するパワー論は、究極的には、研究者自身の世界観ならびにパワー・ポリティクスの世界においていかに安全を確保するのかという処方箋が端的に示されており、極めて重要である。

その第2は、論争状況に対する関心である。パワー論争に注目することによって、研究者間の見解の共通点・相違点がより明確になると思われる。

その第3は、パラダイムに対する関心である。いわゆる国際理論を構成するパラダイムとして用いられている、例えば、現実主義と理想主義に代表される対置的に把握されがちなパラダイム、あるいは勢力均衡、集団安全保障、リベラリズム、さらにはデモクラシーなどの政治理念が、パワー概念をめぐる論争状況において、いかに顕在あるいは潜在しているのか、またそれらがいかなる意味において使用されているのか（例えば、批判用語か否か）、という関心がそれである。

その第4は、方法論に対する関心である。すなわち、パワー論の方法論的特徴として、当時の学界の研究動向、例えば、政治学、地政学、歴史学、経済学、法学、あるいは社会学などの隣接諸科学の諸成果との関係はいかなるものなのかという関心がそれである。

その第5は、政策論に対する関心である。これは、パワー論が果たした実践的意味（ガイダンス機能）、つまりパワー論がアメリカ対外政策の批判を意図したものなのか、あるいは正当化を意図したものなのかという関心である。なぜならば、パワー論は、アメリカ対外政策批判にも、また正当化のためにも用いられてきたからである。本研究では、その具体的な視点として、それぞれのパワー論が実際のアメリカ対外政策にどのように関わっていたのかということに注目するとともに、それぞれの研究者がアメリカ政府の政策立

案・決定過程にいかなる形で関与していたのかについても言及していきたい。

その第6は、パワー論の変化に対する関心である。本研究では、とりわけ、次稿以降において、同一研究者のパワー論の時代的変遷や盛衰についても明らかにしていきたい。

筆者は、これまでの拙稿において、パワー概念をめぐる一連の論争状況を、その登場期にまでさかのぼり、時代ごとに転機となった主要な議論を取り上げることによって確認してきた。その考察の過程で、パワー論と呼ぶほどには体系的でないにしても、パワー概念の先駆的な使用を1900年代以降のヨーロッパ列強の帝国主義批判とそれに対する対応策を考察する文脈の中で確認するとともに⁹⁾、この概念が、アメリカ国際理論研究において、30年代から40年代にかけての時期に本格的に覚醒・受容されたことを具体的に確認することができた¹⁰⁾。

そこで本稿では、以下に取り上げる3つの次元・識別基準を組み合わせることによって、パワー概念の覚醒・受容をめぐる多元的性格およびその相関性を具体的に確認し、次稿以降におけるこの概念の「アメリカ的受容」へと至る一連の論争状況のダイナミズム（パワー論争の多元化と収斂）の考察に備えたい。筆者が、この類型化作業で用いる3つの次元・識別基準とは、次の通りである。

すなわち、第1のパワー概念に付与した意味の相違という次元では、それぞれの研究者が「パワー」という用語にいかなる意味を付与しているのかという観点から、軍事的要素ないし強制的側面を強調する諸立場、あるいは「国力」としてその幅広い構成要素を確認する立場に類型化する。

第2の勢力均衡の意義をめぐる認識の相違という次元では、「高い」から「低い」までのスペクトルを設定し、さらにその意義をめぐる認識の根拠として、勢力均衡にいかなる契機を見いだしそのいずれを強調・重視するのかという観点から、「対立」「調整」「安定」という3契機を設定する。

第3のパワー・ポリティクスへのアメリカの対応策をめぐる相違という次元では、それぞれの研究者が、アメリカの対応策をめぐる、いかなる議論を展開しているのかという観点から類型化を試みる。

これら3つの次元・識別基準にしたがって、パワー論の類型化作業を試みるならば、その組み合わせから、次ページの表で示したように、パワー概念の覚醒・受容をめぐる潮流として、立場A（集団安全保障擁護論）、立場B（デモクラシー擁護論(1)(2)）、立場C（政策科学論）、立場D（国内問題優先論）、立場E（折衷論）、立場F（国家安全保障論(1)(2)）、および立場G（勢力均衡擁護論）、という7潮流（実質的には、9潮流）を確認することができる。

表 パワー論をめぐる7潮流

立場	「パワー」の意味	勢力均衡の意義(契機*)	パワー・ポリティクスへのアメリカの対応策	パワー論登場の年代およびその代表的研究者
A: 集団安全保障論	「平和強制力」 (軍事的要素の強調)	低(対立)	普遍的な国際機構によるパワーの一元的管理・一元の行使を要請	30年以前……ライト(1921, 22) 30年代……ライト(1930, 34, 35, 36) シューマン(1931, 33, 36) ステイラー(1935, 37, 38, 39) ラッセル(1936) ベッカー(1937) スタイナー(1940) 40年代前半……ライト(1942, 43, 44) ステイラー(1942) マッキナーバー(1943)
B: デモクラシー擁護論	平和を組織化する事実上の国力 (軍事・経済的要素の強調)	中(対立・調整)	B(1): デモクラシー諸国への支援/デモクラシー諸国による国際協調を要請 B(2): デモクラシー諸国による大同盟を通じたパワー行使を要請	30年以前……ラインシュ(1900) 30年代……マンロン(1933) ライス(1938) 40年代前半……ブランチ(1941) 30年以前……リップマン(1915, 17) 30年代……リップマン(1938) 40年代前半……ゲルバー&ゲーチ(1940) シューマン(1940, 42, 45) ベッカー(1943) リップマン(1943, 44)
C: 政策科学論	諸価値を賦与・剥奪する 事実上の強制力	中(対立・調整)	パワー・エリートによるプロパガンダもしくはシンボル操作を要請	30年以前……ラスウェル(1927) 30年代……ラスウェル(1935) 40年代前半……ラスウェル(1941)
D: 国内問題優先論	事実上の国力 (政治・経済的要素の重視)	中(対立・調整)	モンロー主義の再評価による抑制的外交を要請	30年以前……ヒアード(1914) 30年代……ヒアード(1934) 40年代前半……ヒアード(1940, 42, 43)
E: 折衷論	事実上の国力 (諸要素・諸資源の総体)	中(対立・調整)	国家主権と集団安全保障の折衷化の模索/ 集団安全保障と勢力均衡の巧みな結合の上でのパワー行使を要請	30年代……フリードリヒ(1938) 胡適(1938) カー(1939) シャープ&カー(1940) 40年代前半……ニーバー(1940, 44) ハーツ(1942) カーク(1944, 45)
F: 国家安全保障論	意図する目的を達成する国力 (諸要素・諸資源の総体)	中(対立・調整)	F(1): 代替型のバランスカーとしての役割を要請 F(2): 国家安全保障の熱意によるパワー・ポリティクスへの選択的関与を要請	30年以前……ロジャーズ(1925) 30年代……シモンズ(1931, 33, 35) エメニー(1934, 37) シモンズ&エメニー(1935) 40年代前半……ブランチ(1941) エメニー(1943) 30年以前……アール(1923) 30年代……ダン(1937) アール(1938, 40) ファイス(1938) スプラウト(1939, 40) 40年代前半……アール(1941, 43) スプラウト(1942, 45) フォックス(1944)
G: 勢力均衡擁護論	国力(諸要素・諸資源の総体; 強制力と非強制力の複合体)	高(対立・調整・安定)	外交を通じて大断のパワー関係の調整 (勢力均衡)を要請	30年代……スバイクマン(1933, 34, 38, 39) モーゲンソー(1939) ウォルフアーツ(1940) 40年代前半……ウォルフアーツ(1942, 45) スバイクマン(1942, 43, 44) シュトラウス・ヒューベ(1942, 45) モーゲンソー(1942, 44)

* 「勢力均衡」の項目の括弧内における下線部分は、勢力均衡の意義をめぐる認識の根拠として、研究者がより強調・重視する勢力均衡の契機を意味する。

2. パワー論をめぐる7潮流

(1) 立場A (集団安全保障擁護論)

まず、この立場Aは、例えば、国際法・政治学者のライト (Quincy Wright)¹¹⁾ による1920年代に登場した先駆的なパワー論をはじめとして、政治学者のシューマン (Frederick L. Schuman)¹²⁾、ラッセル (Frank M. Russell)¹³⁾、スタイナー (H. Arthur Steiner)¹⁴⁾、マッキーバー (Robert M. MacIver)¹⁵⁾、歴史学者のベッカー (Carl Becker)¹⁶⁾、さらには経済学者のステイリー (Eugene Staley)¹⁷⁾ などの30年代前半以降に登場したパワー論によって代表されるものである。その特徴は、次のとおりである。

すなわち、その第1は、パワー・ポリティクスおよび勢力均衡を、「軍事的権力闘争」、「不都合な状態」、「戦争によるパワー関係の不断の調整」、あるいは「文明の破局を導くもの」などと認識することによって、その不正義性、逸脱性、平和攪乱性、暴力性、邪悪性および無慈悲性を指摘し、その「対立の契機」を強調することである。

その第2は、上述の理由から普遍的な国際機構による「パワー」の一元的管理を主張し、40年代前半に至っては、「パワー」を、パワー・ポリティクスの廃絶という上位目的達成のための手段、つまり「パワー」を平和強制目的に使用することの意義を強調することによって、パワー概念を事実上の軍事的強制力を意味する「平和強制力」あるいは「国際警察力」として再解釈し、その一元的行使を普遍的な国際機構に要請することである。

その第3は、パワー・ポリティクスへのアメリカの対応策として、国際連盟さらには世界政府などの普遍的な国際機構による集団(国際)安全保障体制の再構築を要請し、このような集団的行動によってファシズムに対する徹底抗戦を主張する政治キャンペーン的性格である。

まず30年代においては、例えば、(1)世界市民・世界連邦的思考を鼓舞する「新たな国際主義」(シューマン)、(2)戦争を規制する任務を担う中央機関としての国際連盟の制度的改革とその諸価値の啓蒙運動(ライト、ベッカー)、(3)効果的な平和教育による闘争意志の制限を意味する「道徳的軍縮」(ライト)、(4)国際連盟を主権国家の連合から連邦的な世界政府の段階へと発展させること(ステイリー)、がそれぞれ要請された。また40年代前半においては、例えば、ライトに見られるように、国際連合協会などを通じて国際連合の設立に尽力する現実政治への関与の積極的姿勢が確認され、例えば、国際連盟において制裁が失敗した経験から、来たるべき新たな「国際安全保障体制」は「国際警察力」(陸海空軍力)によって補強されるべきであるとする「国際警察力を通じた安全保障の組織化」が要請された。

(2) 立場B (デモクラシー擁護論)

この立場Bは、デモクラシーを擁護する目的から、デモクラシーに適合したパワー・ポリティクス、つまり「デモクラシー的パワー・ポリティクス」を模索するものである。この立場Bは、時代背景およびパワー・ポリティクスへの対応策の相違から、さらに以下の2つの立場に分けられるが、その両者に共通する特徴としては、(1)パワー・ポリティクスおよび勢力均衡の意義をめぐる認識において、「対立の契機」だけではなく「調整の契機」としての側面も存在していることを認めながらも、立場Aと同様に、その軍事的・対立的側面およびその不安定性に対する根強い不信感から「対立の契機」を強調すること、

(2)それゆえにこのような欠陥を解決する目的で、デモクラシーあるいは自由などのアメリカ的諸価値によって支援された事実上の「国力」を意味する「パワー」(軍事・経済的要素の強調)を、平和の組織化のために使用しようとする志向性が見られること、(3)例えば、マハンの対外干渉論を肯定的に受け入れ、アメリカの対外干渉をデモクラシーの名の下に合理化あるいは正当化する姿勢が見られること、が挙げられる。

(i)立場B(1)

まず立場B(1)は、ラインシュ(Paul S.Reinsch)¹⁸⁾による1900年代のパワー論を嚆矢として、とくに一連のベルサイユ・ワシントン体制の崩壊過程である30年代前半以降に登場した、例えば、マンロ(William B.Munro)¹⁹⁾、ライス(Charles K.Leith)²⁰⁾、ブラナウアー(Esther C.Brunauer)²¹⁾などの政治学者もしくは歴史学者による「デモクラシーの危機」問題の解決を模索するパワー論に代表されるものである。そのパワー・ポリティクスへのアメリカの対応策に見られる特徴は、ナチス・ドイツの台頭に対抗しヨーロッパに安定をもたらすために、アメリカの「パワー」を、ヨーロッパのデモクラシー諸国を支援する目的(マンロ)、あるいはデモクラシー諸国を中心とした国際的な協調政策を推進する目的(ライス、ブラナウアー)で用いるべきであると主張することである。

その具体的主張としては、(1)デモクラシーが危機に瀕している旧大陸の出来事に対してアメリカは無関心であってはならず、アメリカには「デモクラシーの擁護者」として、世界文明が破局に陥るのを防ぐという責任があること(マンロ、ライス)、(2)「デモクラシーの名の下での責任」から、アメリカは「自由の合法的手段としてのパワー」の意義を認識すべきであり、その「パワー」を、対外的には「自国民の自由の保護」ならびに「この自由が脅かされない環境の保全」のために用いるべきであること(ブラナウアー)、が挙げられる。

(ii)立場B(2)

次の立場B(2)は、例えば、リップマン(Walter Lippmann)²²⁾による1910年代の先駆的なパワー論をはじめとして、ゲルバー(Lionel Gelber)とグーチ(Robert K.Gooch)²³⁾、さらには前述したシューマン²⁴⁾やベッカー²⁵⁾などの政治学者もしくは歴史学者に代表される40年代に登場したパワー論である。この立場B(2)に見られるパワー・ポリティクスへのアメリカの対応策の特徴は、枢軸国側に対する、いわば「パワーの均衡化政策」という名の「パワーの優越化政策」である。その具体的主張は、次のとおりである。

すなわち、(1)「パワー」を平和の組織化のために使用すべきであるという観点から、デモクラシー諸国から構成される「平和愛好国家(群)へのパワーの蓄積」が必要であること(リップマン)。(2)アメリカは「自由などの啓蒙化されたインタレストに基づいた新たなパワー秩序の組織者」にならなければならないこと(同)。(3)アメリカは、その自由によって支援された勢力均衡政策を遂行する必要があること。その政策は、自由の道具であるデモクラシーの卓越性を具現化する勢力均衡政策であり、長期的にはドイツに対抗する勢力の「パワーの優勢」状況を志向するものであること(ゲルバーとグーチ)。(4)枢軸国側に対抗するデモクラシー諸国から構成される、共通の価値観を有しなおかつ圧倒的な「パワーの優勢」を有する「安定的な恒久的同盟」(大同盟)に、「平和を組織化するパワー」の行使を要請すること(リップマン、シューマン、ベッカー)。

(3) 立場C (政策科学論)

この立場Cは、パワー・ポリティクスに対するデモクラシーの擁護という姿勢を前述の立場AおよびBと共有しつつ、経験主義的視座からパワー概念の操作化を要請するものであり、例えば、ラズウェル (Harold D.Lasswell)²⁶⁾ による1930年代半ば以降に顕著な政策科学を志向するパワー論によって代表されるものである。この立場Cの特徴は、次のとおりである。

すなわち、その第1は、「世界政治」における「パワーの均衡化過程」の不安定化とその最終的帰結としての戦争に対する人類の不安感を払拭するために、デモクラシーに適した「パワーの均衡化」状況を創造すべきであるという観点から、パワー・ポリティクスへのアメリカの対応策として、(1)「パワー」の「適切な行使」と「不適切な濫用」とを峻別すること、(2)「パワー」という手段を適切に利用することによって、より良い社会の実現を希求すること、(3)「パワー」の担い手としての「パワー・エリート」に対して、「プロパガンダ」もしくは「シンボル操作」などを通じてそれを「抑圧」のためではなく「解放」のために用いること、をそれぞれ提唱し、「予防政治学」の意義を主張することである。

その第2は、この「予防政治学」を、方法論的に「科学としての政治学」(政策科学)として確立させるべく、次のようにパワー概念の操作化を試みることである。すなわち、(1)「科学としての政治学」確立のために、心理学あるいは社会学などの隣接諸科学の成果を積極的に取り入れた学際的アプローチを採用すること、(2)「世界政治過程」に参画するアクターを「国家」に還元せず、「パワー・エリート」として多元主義的に把握すること、(3)政治分析を、パワー関係の考察、つまりパワー・エリートによる諸価値の賦与・剥奪関係と規定し、パワー関係を諸価値の交換過程とみなすこと、(4)「パワー」は、政治を規定する諸価値のひとつとして、例えば「啓蒙」などの政治的価値と結びつけられることによって、他の諸価値と連関的に操作化されること、(5)この中で「パワー」は、価値賦与・剥奪をおこなう、事実上の強制力を意味するものとして捉えられること、がそれである。

(4) 立場D (国内問題優先論)

この立場Dは、例えば、歴史学者のビアード (Charles A.Beard)²⁷⁾ が1930年代半ば以降に明示的に主張するようになったパワー論に代表されるものであり、その特徴は次のとおりである。

すなわち、その第1は、パワー・ポリティクスおよび勢力均衡の意義をめぐる認識において、「対立の契機」と「調整の契機」の存在を認め、とりわけその「調整の契機」を重視した上で、事実上の「国力」を意味する「パワー」(政治・経済的要素の重視)の有限性を認識し、それを対外的というよりはむしろ対内的に優先使用すべきと主張することである。

その第2は、「デモクラシーのパワー」に対しても制限が必要であるという観点から、マハンのシー・パワー論さらにはそれを事実上容認するその後の議論に対して異議を唱え、例えば、ドル外交などに見られるアメリカの一連の経済的な対外進出もヨーロッパ列強の場合と同様に「帝国主義」であると批判する姿勢である(「アメリカ帝国主義」批判)。

その第3は、パワー・ポリティクスへのアメリカの対応策として、モンロー主義の今日的意義およびその継続の必要性を指摘することである。すなわち、(1)アメリカは、ヨー

ロップおよびアジアに対して平和を強制する「パワー」を有しておらず、その物理・経済・政治的限界を自覚し、それに準じた責任を果たすに留めるべきであること、(2)アメリカ的伝統を擁護するために「初期の適切かつ抑制的な外交」を再評価し、それへの回帰を意味する「大陸主義」を要請すること、がそれである。

(5) 立場E (折衷論)

この立場Eは、例えば、カー (Edward H. Carr)²⁸⁾ のように英米双方の学界において活躍した政治学者、あるいはフリードリヒ (Carl J. Friedrich)²⁹⁾、ハーツ (John H. Herz)³⁰⁾ などの大陸ヨーロッパから移住・亡命してきた政治学者、そして胡適 (Hu Shih)³¹⁾ のようにアメリカにおいても活躍した中国人哲学者、さらには神学者であるニーバー (Reinhold Niebuhr)³²⁾、政治学者のカーク (Grayson L. Kirk) とシャープ (Walter R. Sharp)³³⁾ などのアメリカ人研究者による、1930年代末から40年代前半にかけて登場したパワー論に代表されるものである。その特徴は、次のとおりである。

すなわち、その第1は、パワー・ポリティクスの遍在性・必然性・不可避性を認めた上で、勢力均衡の意義をめぐる認識において、「管理されたアナキー状態」(ニーバー)としての勢力均衡の陥穽(対立の契機)を意識しつつも、その「調整の契機」に期待する姿勢である。

その第2は、対置的かつ対立的に捉えられがちな概念の統合的な把握を要請する立場から、パワー概念が意義を持つには、例えば、国際道義(カー)、国家を超えた普遍的価値(ニーバー)、あるいは生得的正義としての「持続的生存」および「恐怖からの自由」を意味するコモン・インタレスト(ハーツ)などとの調和・統合が必要であると主張することである。

その第3は、例えば、ニーバーに見られるように、「強大なパワーに対するおごりと自らの責任に対するシニカルな無頓着さ」をふりまわしているアメリカ外交に対して、パワーの所有と責任の不可分性、および自らの権力欲に対する道徳的抑制についての自覚を促す規範論的姿勢である。

その第4は、例えば、カークに見られるように、国際関係におけるパワー要素の無視・軽視はパワーの濫用と同様に非難されるべきであり「適度に強力な軍事力によって支援される巧みな政治的技倆が最大限の可能性を与えてくれる」との立場から、「国力」(諸要素・諸資源の総体)を意味する「パワー」の「建設的使用」をアメリカに要請する姿勢である。

その第5は、パワー・ポリティクスへのアメリカの対応策として、国家主権と集団安全保障の折衷化を模索し、いわば集団安全保障と勢力均衡との巧みな結合にその前途を委ねるべきと主張することである。すなわち、(1)「地域的平和機構」(胡適)あるいは「地域間安全保障」制度(シャープとカーク)の創設による勢力均衡の制度的補完(勢力均衡の逸脱阻止)の必要性の主張、(2)パワーの組織化の担い手を「効果の上がない」国家の自発的関与に任せる案と「実現不可能な」超国家的政府に任せる案の折衷案として、国家主権を除去せず国家の共存関係を維持するとともに「伝統的なパワー・ポリティクスが直面しているところの悪循環」を断ち切る方向で「組織化された強制力の集団的使用」を要請する、勢力均衡原理の現代的諸条件への適応策としての「刷新されたパワー・ポリティクス」(普遍的安全保障)を志向する新秩序構想(ハーツ)、(3)同様に、アメリカは、国

家間の主権の平等が確保された上で既存のパワー分布を基盤として構築される「国際安全保障機構」を通じて、その国力を行使すべきであるとする「国際安全保障」構想(カーク)がそれである。

(6)立場F(国家安全保障論)

この立場Fは、時代背景およびパワー・ポリティクスへの対応策の相違から、さらに以下の2つの立場に分けられるが、その両者に共通する特徴としては、(1)パワー・ポリティクスの遍在性・必然性・不可避性の認識、(2)パワー・ポリティクスおよび勢力均衡の意義をめぐる認識において「対立の契機」と「調整の契機」の存在を認め、とりわけ、その「調整の契機」としての意義を強調すること、(3)国家安全保障研究の重要性の指摘、(4)パワー・ポリティクスへの選択的関与の意義の強調、が挙げられる。

(i)立場F(1)

まず立場F(1)は、例えば、海軍少将のロジャーズ(William L.Rodgers)³⁴⁾による1920年代後半に登場したパワー論、そして、ジャーナリストのシモンズ(Frank H.Simonds)と経済学者のエメニー(Brooks Emeny)³⁵⁾、歴史学者のファークツ(Alfred Vagts)³⁶⁾による30年代前半以降に登場したパワー論に代表されるものである。その特徴は、次のとおりである。

すなわち、その第1は、アメリカの地理的優位性を根拠とする防衛上の自信を表明することである。これは、立場F(1)のパワー論のすべてに共通する特徴であり、アメリカは経済的にも安全保障的にも自給自足が可能であり、その「国力」(諸要素・諸資源の総体)の他国に対する圧倒的優位性は、防衛的には揺るぎないものであるという認識である。

その第2は、しかしながら、一連の国際情勢の悪化を受けて、アメリカは、国家安全保障上の観点から、その「国力」を聡明に用いる方策を慎重に考慮すべき時期に来ているという認識を示すものである。

その第3は、アメリカに最も適合しているパワー・ポリティクスへの対応策として、「光栄ある孤立」と呼ばれるイギリス型の勢力均衡政策を推奨することである。それは世界的な勢力均衡状況の安定化に向けた一定限度のアドホックな関与、つまりその時々紛争原因を駆除するバランスラーとして、選択的に国際問題に関与すべきことを主張するものである。

その具体策としては、例えば、(1)普遍的な国際機構の紛争解決機能に懐疑的な観点から、外交を通じた紛争解決の意義を強調すること(ロジャーズ、シモンズ)、(2)「持てる国」であるアメリカは、「平和の代償」として「持たざる国」の要求に対して一定の譲歩をすべきであるという主張(シモンズ、エメニー)、(3)アメリカは、実際にモンロー主義における「孤立主義と勢力均衡政策の共存」に見られるように、「共存のための調整原理としての世界的な勢力均衡政策」を今日まで遂行してきたことから、今後とも「西半球防衛」に徹すべきであるという主張(ファークツ)、が挙げられる。

(ii)立場F(2)

次の立場F(2)は、例えば、歴史学者のアール(Edward M.Earle)³⁷⁾、国際法・政治学者のダン(Frederick S.Dunn)³⁸⁾、政治学者のスプラウト夫妻(Harold Sprout & Margaret Sprout)³⁹⁾、フォックス(William T.R.Fox)⁴⁰⁾、経済学者のフェイス(Herbert Feis)⁴¹⁾などの1930年代後半以降に登場したパワー論によって代表されるものである。その危機意識は、

迫り来る戦争の危機感から、立場F(1)と比較してより強いものになっている。その特徴は次のとおりである。

すなわち、その第1は、パワー・ポリティクスの遍在性・必然性・不可避性を認識することによって、「パワー」を、軍事・経済・政治的要素などから構成される諸要素・諸資源の総体を意味する「国力」として受容することである。

その第2は、勢力均衡の「調整の契機」としての意義を強調するものの、これを「安定の契機」とみなすことについては後述する立場Gに見られる主張ほど積極的ではなく、例えば、モンロー主義における孤立主義と勢力均衡政策の共存およびイギリス型の勢力均衡政策を意味する「アングロサクソンの勢力均衡論」(立場DおよびF(1))の伝統に対する自負(アール)、あるいは「勢力均衡による絶対的な安定は、正直なところ望みえない」とする不安感(スプラウト)から、アメリカの政治的伝統における地理学と安全保障の結びつきの深さを歴史的に検証することによって、アメリカの政治的伝統と地理的条件に調和した国家安全保障研究の必要性を強調することである。すなわち、(1)国力研究を「軍事上の必然性」とアメリカの「政治的自由」との妥協のうちに国家安全保障研究の範疇で捉えるべきであるという要請(アール)、(2)国力と国家安全保障をめぐる熟慮の最重要性の指摘(ダン)、(3)ユートピア社会の一足飛びな到来に疑念を挟む一方で、我々の社会の不完全性を受け入れることは敗北主義ではなく、新世界秩序の構築は一步ずつの前進でしか達成されえないとして、アメリカの国家安全保障上の要請にかなう平和戦略の枠組みづくりを主張し、そのための国力研究を要請すること(スプラウト)、がそれである。

その第3は、研究拠点を同じくする後述の立場Gのスパイクマン(Nicholas J.Spykman)、ウォルファーズ(Arnold Wolfers)、あるいはシュトラウス・ヒューペ(Robert Strausz-Hupé)などと連携することによってアメリカの軍事・対外政策をめぐる共同研究を行ない、このような大陸ヨーロッパからの移住・亡命研究者との共同研究を通じて、大陸ヨーロッパの地政学的見方を受容したことである。その上で、例えば、スプラウトに見られるように、アメリカの政治的伝統と地理的条件に調和した国家安全保障研究の必要性を強調することによって、マハン(Alfred T.Mahan)的なシー・パワーを基調とする対外干渉論に異議を唱え、パワー・ポリティクスへの選択的関与を主張することである。

その第4は、パワー・ポリティクスへの選択的関与を次のような視点から主張することである。すなわち、(1)大国としての責任の履行とともに、パワーの行使における道徳的抑制に留意すべきであること(アール、スプラウト、フォックス)。(2)安定し公正な戦後秩序を維持するという観点からアメリカのナショナル・インタレストを明確化させることによって、超大国間の協調(とりわけ、米ソ関係の重視)を通じた安全保障の可能性と限界を慎重に考慮すべきであること(フォックス)。(3)ヨーロッパおよび極東におけるバイタル・インタレスト(イギリスの独立とそのシー・パワーの維持ならびに枢軸国に対抗するすべての国の存続)を考慮する観点からの「思慮深くかつ意図を持った外交・軍事・国内政策の統合」が必要であること(アール)。「外交・通商・軍事上のあらゆるマヌーバー」をその対外政策において継続的に駆使する必要があること(フェイス)。

(7) 立場G(勢力均衡擁護論)

この立場Gは、1930年代後半から40年代前半にかけて登場した、例えば、スパイクマン⁴²⁾、ウォルファーズ⁴³⁾、モーゲンソー(Hans J.Morgenthau)⁴⁴⁾、あるいはシュトラウス・ヒューペ⁴⁵⁾

などの大陸ヨーロッパから移住・亡命してきた政治学者に代表されるパワー論であり、その特徴は次のとおりである。

すなわち、その第1は、「パワー」を、パワー・ポリティクス(power politics)の遍在性・必然性・不可避性を認識する観点から、国家の「目的-手段」の緊張関係の中で捉え、それを、例えば、説得力・交換力・強制力の複合体(スパイクマン)、強制力と非強制力の複合体(ウォルフアーズ)、あるいは軍事・経済・政治的要素から構成される諸要素・諸資源の総体(スパイクマン、ウォルフアーズ、モーゲンソー、シュトラウス・ヒューベ)を意味する「国力」とみなすことである。

その第2は、大陸ヨーロッパの伝統的な調整・安定原理である勢力均衡の意義を強調することである。

その第3は、平和維持の最良の手段としての外交の最重要性を強調し、外交を通じた不断のパワー関係の調整を要請することである。

その第4は、例えば、マハン、マッキンダー(Halford Mackinder)、ハウスホフナー(Karl Haushofer)などの所論を止揚する視点からアメリカのパワー・ポジションを考察し、戦争と平和をめぐる包括的戦略を提示したスパイクマン、あるいはドイツの地政学的発想に対応するための政治戦略の構築を要請したシュトラウス・ヒューベに見られるように、アメリカ対外政策の考察に大陸ヨーロッパ的な地政学的思考を導入し、前述の立場Fとともにアメリカの国家安全保障の覚醒に貢献したことである。

その第5は、パワー・ポリティクスへのアメリカの対応策として、(1)「合理性を逸した強制的措置」にこだわるフランス型の「圧倒的な力によるパワーの優越化政策」(立場B)あるいはアドホックな「調停・宥和政策」としてのイギリス型の勢力均衡政策(立場F(1))ではない、各国間の「バイタル・コモン・インタレスト」(平和の保証)を尊重した上での「ナショナル・インタレスト」に基づく「平和戦略の手段としての勢力均衡」の採用(ウォルフアーズ)、(2)地理的に画定されるところの3つの「パワー・ゾーン」(欧州、極東および西半球)に対して、不断に政治参加することによる「均衡化されたパワー」状況の創造(スパイクマン)、(3)同様に、ヨーロッパおよびアジアの「パワー・ブロック」における勢力均衡ゲームへの不断の参加(シュトラウス・ヒューベ)、をそれぞれ要請することである。

おわりに

以上、パワー概念の覚醒・受容をめぐる潮流を7つ(実質的には9つの潮流)に分類したことによって、パワー概念の覚醒・受容をめぐる多元的性格とその相関性を確認することができた。

次稿以降においては、この分類を用いることによって、パワー概念の「アメリカ的受容」へと至る一連の論争状況のダイナミズム(パワー論争の多元化と収斂)をフォローした上で、その意味および問題点を議論していきたい。

注

- 1) 拙稿「国際理論研究におけるパワー概念の『アメリカ的受容』(1) — 先行研究との対話 —」『島根県立大学・総合政策論叢』第1号、2001年、1-20頁。
- 2) Richard J.Stoll & Michael D.Ward. "Grist for the Mill," in R.J.Stoll & M.D.Ward, eds., *Power in World Politics*, Boulder & London: Lynne Rienner, 1989, pp.1-8.
- 3) Michael P.Sullivan, *Power in Contemporary International Politics*, Columbia: University of South Carolina Press, 1990, pp. 183-209.
- 4) John M.Rothgeb,Jr., *Defining Power: Influence and Force in the Contemporary International System*, New York: St.Martin's Press, 1993, pp. 17-50.
- 5) Dennis G.Sullivan, "Power," in *Toward an Inventory of Major Propositions Contained in Contemporary Textbooks in International Relations*, Doctoral Dissertation, Northwestern University, 1963, pp. 99-141.
- 6) Kjell Goldmann, "Notes on the Power Structure of International System," *Cooperation and Conflict*, Vol. 12, No. 1, 1977, pp. 1-20.
- 7) David A.Baldwin, "Power Analysis and World Politics: New Trends versus Old Tendencies," *World Politics*, Vol. 31, No. 1, pp. 161-94; "Interdependence and Power: A Conceptual Analysis," *International Organization*, Vol. 34, No. 4, 1980, pp. 471-506.
- 8) 「概念分析」については、前掲拙稿、2001年、11-2頁、およびDavid A.Baldwin, *Paradoxes of Power*, New York & Oxford: Basil Blackwell, 1989, pp. 1-9.を参照。
- 9) 拙稿「アメリカ国際理論研究におけるパワー論の登場(2) — 1930年代 —」『早稲田政治公法研究』第48号、1995年、29-56頁。
- 10) 拙稿「アメリカ国際理論研究におけるパワー論の登場(3) — 1940年代前半 —」『早稲田政治公法研究』第50号、1995年、33-62頁。
- 11) Quincy Wright, "The Control of Foreign Relations," *The American Political Science Review*, Vol. 15, No. 1, 1921, pp. 1-26; *The Control of American Foreign Relations*, New York: Macmillan, 1922, pp. IX-X, pp. 3-9, pp. 71-5, p. 265, p. 293, pp. 360-73; *Mandates under the League of Nations*, Chicago: The University of Chicago Press, 1930, p. 291; "Is the League of Nations the Road to Peace?" *The Political Quarterly*, Vol. 5, No. 1, 1934, pp. 92-106; *The Causes of War and the Conditions of Peace*, New York: Longmans, Green & Company, 1935, p. 10, p. 17, pp. 49-72, p. 104, p. 125; "National Sovereignty and Collective Security," *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol. 186, 1936, pp. 94-104; *A Study of War*, Chicago: The University of Chicago Press, 1942, pp. 743-60, pp. 1326-52; "International Law and the Balance of Power," *The American Journal of International Law*, Vol. 37, No. 1, 1943, pp. 97-103; "National Security and International Police," *The American Journal of International Law*, Vol. 37, No. 3, 1943, pp. 499-505; "United Nations: Phrase or Reality?" *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol. 228, 1943, pp. 1-10; "Peace Problems of Today and Yesterday," *The American Political Science Review*, Vol. 38, No. 3, 1944, pp. 512-21.
- 12) Frederick L.Schuman, *War and Diplomacy in the French Republic: An Inquiry into Political Motivations and the Control of Foreign Policy*, New York: McGraw-Hill, 1931, pp. 387-422; *International Politics: An Introduction to the Western State System*, New York & London: McGraw-Hill, 1933, pp. 54-9, pp. 491-533, pp. 845-54; "Book Review: Frank H.Simonds and Brooks Emeny's *The Price of Peace* & Frank H.Simonds's *American Foreign Policy in the Post-War Years*," *The American Journal of International Law*, Vol. 30, No. 1, 1936, pp. 172-4.
- 13) Frank M.Russell, *Theories of International Relations*, New York & London: D.Appleton-Century Company, 1936, p. 258, p. 324, p. 353, pp. 430-1, pp. 539-49.
- 14) H.Arthur Steiner, *Principles and Problems of International Relations*, New York: Harper & Brothers,

- 1940, pp. 3 - 9 , pp. 383-416.
- 15) Robert M. MacIver, *Toward an Abiding Peace*, New York: Macmillan, 1943, pp. 1 -39, pp. 134-95.
 - 16) Carl Becker, "Loving Peace and Waging War," *The Yale Review*, Vol. 26, No. 4 , 1937, pp. 649-68.
 - 17) Eugene Staley, *Foreign Investment and War*, Chicago: The University of Chicago Press, 1935, pp. 1 - 23 ; *Raw Materials in Peace and War*, New York: Council on Foreign Relations, 1937. (邦訳、山田文雄訳『国際原料資源論』中央公論社、1940年、170-237頁); "Power Economy versus Welfare Economy," *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol. 198, 1938, pp. 9 - 14 ; *World Economy in Transition: Technology vs. Politics, Laissez-Faire vs. Planning, Power vs. Welfare*, New York: Council on Foreign Relations, 1939, pp. 203-22, pp. 314-33 ; "Book Review: Nicholas J. Spykman's *America's Strategy in World Politics*," *The American Economic Review*, Vol. 32, No. 4 , 1942, pp. 893 - 8 .
 - 18) Paul S. Reinsch, *World Politics at the End of the Nineteenth Century*, New York: Macmillan, 1900, pp. V-VI, p. 9 , p. 17, p. 57, p. 74, pp. 361 - 2 .
 - 19) William B. Munro, "Present-Day Forces in European Politics," *The American Scholar*, Vol. 3 , No. 2 , 1933, pp. 187-93.
 - 20) Charles K. Leith, "Mineral Resources and Peace," *Foreign Affairs*, Vol. 16, No. 3 , 1938, pp. 515-24.
 - 21) Esther C. Brunauer, "Power Politics and Democracy," *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol. 216, 1941, pp. 109-16.
 - 22) Walter Lippmann, *The Stakes of Diplomacy*, New York: Holt, 1915, p. 127, p. 177, pp. 189-95, pp. 219-28 ; *The Stakes of Diplomacy*, 2nd ed., New York: Holt, 1917, pp. IX-XXII; "After Geneva: The Defense of the Peace," *The Yale Review*, Vol. 27, No. 4 , 1938, pp. 649-63 ; *U.S. Foreign Policy: Shield of the Republic*, Boston: Little, Brown & Company, 1943, pp. 1 - 9 , pp. 100-8 , pp. 161-77 ; *U.S. War Aims*, Boston: Little, Brown & Company, 1944, pp. 63-95, pp. 131-54, pp. 191-5 .
 - 23) Lionel Gelber & Robert K. Gooch, *War for Power and Power for Freedom*, New York: Farrar & Rinehart, 1940, pp. 3 -32.
 - 24) Frederick L. Schuman, "War, Peace, and the Balance of Power," *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol. 210, 1940, pp. 73-81 ; *Design for Power: The Struggle for the World*, New York: Alfred A. Knopf, 1942, pp. 290-309 ; "The Dilemma of the Peace-Seekers," *The American Political Science Review*, Vol. 39, No. 1 , 1945, pp. 12-30.
 - 25) Carl Becker, "How New Will the Better World Be?" *Yale Review*, Vol. 32, No. 3 , 1943, pp. 417-39.
 - 26) Harold D. Lasswell, *Propaganda Technique in the World War*, New York: Alfred A. Knopf, 1927, p. 9 ; *World Politics and Personal Insecurity*, New York: McGraw-Hill, 1935, pp. 3 -20, pp. 40-71, pp. 181-217 ; "The Garrison State," *The American Journal of Sociology*, Vol. 46, No. 4 , 1941, pp. 455-68.
 - 27) Charles A. Beard, *Contemporary American History: 1877-1913*, New York: Macmillan, 1914, pp. 202-3 ; *The Idea of National Interest: An Analytical Study in American Foreign Policy*, New York: Macmillan, 1934, pp. 410-39 ; *A Foreign Policy for America*, New York: Alfred A. Knopf, 1940, pp. 3 -18, pp. 36-46, pp. 134-54 ; Charles A. Beard & Mary R. Beard, *The American Spirit*, New York: Macmillan, 1942. (邦訳、高木八尺・松本重治訳『アメリカ精神の歴史』岩波書店、1954年、232-60頁); Charles A. Beard, *The Republic: Conversations on Fundamentals*, New York: The Viking Press, 1943. (邦訳、松本重治訳『アメリカ共和国—アメリカ憲法の基本的精神をめぐる—』みすず書房、1988年、390-427頁)
 - 28) Edward H. Carr, *The Twenty Years' Crisis 1919-1939: An Introduction to the Study of International Relations*, London & New York: Macmillan, 1939, pp. 131-85, pp. 264-307.
 - 29) Carl J. Friedrich, *Foreign Policy in the Making: The Search for a New Balance of Power*, New York: W.W. Norton, 1938, pp. 38-9 , pp. 116-59, pp. 186-222, p. 255.

- 30) John H. Herz, "Power Politics and World Organization," *The American Political Science Review*, Vol. 36, No. 6, 1942, pp. 1039-52.
- 31) 胡適 (Hu Shih), "The Changing Balance of Forces in the Pacific," *Foreign Affairs*, Vol. 15, No. 2, 1937, pp. 254-9.
- 32) Reinhold Niebuhr, *Christianity and Power Politics*, New York: Charles Scribner's Sons, 1940, p. 26, pp. 59-62, p. 123, p. 131, pp. 138-44; *The Children of Light and the Children of Darkness: A Vindication of Democracy and a Critique of Its Traditional Defense*, New York: Charles Scribner's Sons, 1944. (邦訳、武田清子訳『光の子と闇の子ーキリスト教人間観によるデモクラシー及びマルキシズムの批判ー』新教出版社、1948年、211-56頁)
- 33) Walter R. Sharp & Grayson L. Kirk, *Contemporary International Relations*, New York: Farrar & Rinehart, 1940, pp. 3-14, pp. 609-31, pp. 749-76; Grayson L. Kirk, "Postwar Security for the United States," *The American Political Science Review*, Vol. 38, No. 5, 1944, pp. 945-55; "The Future Security of the United States," *Proceedings of the Academy of Political Science*, Vol. 21, No. 3, 1945, pp. 270-6; "National Power and Foreign Policy," *Foreign Affairs*, Vol. 23, No. 4, 1945, pp. 620-6.
- 34) William L. Rodgers, "Can Courts and Tribunals Maintain World Peace?" *Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol. 120, 1925, pp. 69-76.
- 35) Frank H. Simonds, *Can Europe Keep the Peace?* New York & London: Harper & Brothers, 1931, pp. 3-11, pp. 260-75, pp. 344-52; *America Faces the Next War*, New York & London: Harper & Brothers, 1933, pp. 1-11, p. 24, p. 51; Brooks Emeny, *The Strategy of Raw Materials: A Study of America in Peace and War*, New York: Macmillan, 1934, pp. 1-11, pp. 166-74; Frank H. Simonds, *American Foreign Policy in the Post-War Years*, Baltimore: The Johns Hopkins Press, 1935, pp. 133-55; Frank H. Simonds & Brooks Emeny, *The Great Powers in World Politics: International Relations and Economic Nationalism*, New York: The American Book, 1935, pp. 21-39, pp. 553-65; *The Price of Peace: The Challenge of Economic Nationalism*, New York & London: Harper & Brothers, 1935, pp. XI-XXVII, pp. 3-43, pp. 334-44; Brooks Emeny, "Raw Materials: Share or Lose?" *The American Scholar*, Vol. 6, No. 4, 1937, pp. 421-34; *Mainsprings of World Politics*, New York: Foreign Policy Association, 1943, pp. 74-86.
- 36) Alfred Vagts, "The United States and the Balance of Power," *The Journal of Politics*, Vol. 41, No. 4, 1941, pp. 401-49.
- 37) Edward M. Earle, *Turkey, the Great Powers, and the Bagdad Railway: A Study in Imperialism*, New York: Macmillan, 1923, pp. VII-IX, p. 127; "American Military Policy and National Security," *Political Science Quarterly*, Vol. 53, No. 1, 1938, pp. 1-13; "National Defense and Political Science," *Political Science Quarterly*, Vol. 55, No. 4, 1940, pp. 481-95; "National Security and Foreign Policy," *Yale Review*, Vol. 29, No. 3, 1940, pp. 444-60; "Political and Military Strategy for the United States," *Proceedings of the Academy of Political Science*, Vol. 19, No. 2, 1940, pp. 112-9; "The Threat to American Security," *Yale Review*, Vol. 30, No. 3, 1941, pp. 454-80; "American Security: Its Changing Conditions," *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol. 218, 1941, pp. 186-93; "Book Review: Quincy Wright's *A Study of War*," *The American Political Science Review*, Vol. 37, No. 1, 1943, pp. 150-3; "Power Politics and American World Policy," *Political Science Quarterly*, Vol. 58, No. 1, 1943, pp. 94-106.
- 38) Frederick S. Dunn, *Peaceful Change: A Study of International Procedures*, New York: Council on Foreign Relations, 1937, pp. V-VI, pp. 1-25, pp. 125-8, pp. 148-51.
- 39) Harold Sprout & Margaret Sprout, *The Rise of American Naval Power: 1776-1918*, New Jersey: Princeton University Press, 1939, pp. V-VI, pp. 1-6, pp. 202-80, pp. 342-86; *Toward a New Order of Sea Power: American Naval Policy and the World Scene: 1918-1922*, New Jersey: Princeton University Press, 1940, pp. 50-72, pp. 88-103; Harold Sprout, "Book Review: Nicholas J. Spykman's

- America's Strategy in World Politics*," *The American Political Science Review*, Vol. 35, No. 5, 1942, pp. 956-8; "The Role of the Great States," *Proceedings of the Academy of Political Science*, Vol. 21, No. 3, 1945, pp. 284-91; Harold Sprout & Margaret Sprout, eds., *Foundations of National Power: Readings on World Politics and American Security*, New Jersey: Princeton University Press, 1945, pp. IX-X, pp. 3-5, pp. 28-31, pp. 63-5, pp. 81-3, pp. 692-5, pp. 731-3.
- 40) William T.R.Fox, *The Super Powers: The United States, Britain, and the Soviet Union: Their Responsibility for Peace*, New York: Harcourt, Brace & Company, 1944, pp. 3-24, pp. 140-62.
- 41) Herbert Feis, "Raw Materials and Foreign Policy," *Foreign Affairs*, Vol. 16, No. 4, 1938, pp. 574-86.
- 42) Nicholas J.Spykman, "Methods of Approach to the Study of International Relations," *Proceedings of the Fifth Conference of Teachers of International Law and Related Subjects*, Washington: Carnegie Endowment for International Peace, 1933, pp. 58-81; "States' Right and the League," *The Yale Review*, Vol. 24, No. 2, 1934, pp. 274-92; "Geography and Foreign Policy(1)," *The American Political Science Review*, Vol. 32, No. 1, 1938, pp. 28-50; "Geography and Foreign Policy(2)," *The American Political Science Review*, Vol. 32, No. 2, 1938, pp. 213-36; "Geographic Objections in Foreign Policy(2)," *The American Political Science Review*, Vol. 33, No. 3, 1939, pp. 391-410; "Geographic Objections in Foreign Policy(2)," *The American Political Science Review*, Vol. 33, No. 4, 1939, pp. 591-614; *America's Strategy in World Politics: The United States and the Balance of Power*, New York: Harcourt, Brace & Company, 1942, pp. 3-26, pp. 446-72; "Letters to the Editors: Geopolitics," *Life*, January 11, 1943, p. 2; Nicholas J.Spykman (edited by Helen R.Nicholl), *The Geography of the Peace*, New York: Harcourt, Brace & Company, 1944, pp. 45-61.
- 43) Arnold Wolfers, *Britain and France between Two Wars: Conflicting Strategies of Peace since Versailles*, New York: Harcourt, Brace & Co., 1940, pp. 3-8, pp. 380-90; "Some Aspects of Foreign Policy," *Yale Review*, Vol. 30, No. 1, 1940, pp. 16-33; "Angro-American Post-War Coöperation and the Interests of Europe," *The American Political Science Review*, Vol. 36, No. 4, 1942, pp. 656-66; "The Role of the Small States in the Enforcement of International Peace," *Proceedings of the Academy of Political Science*, Vol. 21, No. 3, 1945, pp. 292-9.
- 44) Hans J.Morgenthau, "The Resurrection of Neutrality in Europe," *The American Political Science Review*, Vol. 33, No. 3, 1939, pp. 473-86; "Book Review: Georg Schwarzenberger's *Power Politics*," *The American Journal of International Law*, Vol. 36, No. 2, 1942, pp. 351-2; "Book Review: Robert M.MacIver's *Towards an Abiding Peace*," *The Journal of Political Economy*, Vol. 52, No. 1, 1944, pp. 91-2.
- 45) Robert Strausz-Hupé, *Geopolitics: The Struggle for Space and Power*, New York: G.P.Putnam's Sons, 1942, pp. VI-XII, pp. 3-47; *The Balance of Tomorrow: Power and Foreign Policy in the United States*, New York: G.P.Putnam's Sons, 1945, pp. 3-38, pp. 239-76.

パワー論をめぐる7潮流(文献リスト)

《立場A》

- Becker, Carl (1937) "Loving Peace and Waging War," *The Yale Review*, Vol. 26, No. 4, pp. 649-68.
- MacIver, Robert M. (1943) *Toward an Abiding Peace*, New York: Macmillan.
- Russell, Frank M. (1936) *Theories of International Relations*, New York & London: D.Appleton-Century Company.
- Schuman, Frederick L. (1931) *War and Diplomacy in the French Republic: An Inquiry into Political Motivations and the Control of Foreign Policy*, New York: McGraw-Hill.
- (1933) *International Politics: An Introduction to the Western State System*, New York & London: McGraw-Hill.
- (1936) "Book Review: Frank H.Simonds and Brooks Emeny's *The Price of Peace & Frank*

- H.Simonds's *American Foreign Policy in the Post-War Years*," *The American Journal of International Law*, Vol. 30, No. 1, pp. 172-4.
- Staley, Eugene (1935) *Foreign Investment and War*, Chicago: The University of Chicago Press.
- (1937) *Raw Materials in Peace and War*, New York: Council on Foreign Relations. (邦訳、山田文雄訳『国際原料資源論』中央公論社、1940年)
- (1938) "Power Economy versus Welfare Economy," *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol. 198, pp. 9-14.
- (1939) *World Economy in Transition: Technology vs. Politics, Laissez-Faire vs. Planning, Power vs. Welfare*, New York: Council on Foreign Relations.
- (1942) "Book Review: Nicholas J.Spykman's *America's Strategy in World Politics*," *The American Economic Review*, Vol. 32, No. 4, pp. 893-8.
- Steiner, H.Arthur (1940) *Principles and Problems of International Relations*, New York: Harper & Brothers.
- Wright, Quincy (1921) "The Control of Foreign Relations," *The American Political Science Review*, Vol. 15, No. 1, pp. 1-26.
- (1922) *The Control of American Foreign Relations*, New York: Macmillan.
- (1930) *Mandates under the League of Nations*, Chicago: The University of Chicago Press.
- (1934) "Is the League of Nations the Road to Peace?" *The Political Quarterly*, Vol. 5, No. 1, pp. 92-106.
- (1935) *The Causes of War and the Conditions of Peace*, New York: Longmans, Green & Company.
- (1936) "National Sovereignty and Collective Security," *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol. 186, pp. 94-104.
- (1942) *A Study of War*, Chicago: The University of Chicago Press.
- (1943) "International Law and the Balance of Power," *The American Journal of International Law*, Vol. 37, No. 1, pp. 97-103.
- (1943) "National Security and International Police," *The American Journal of International Law*, Vol. 37, No. 3, pp. 499-505.
- (1943) "United Nations: Phrase or Reality?" *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol. 228, pp. 1-10.
- (1944) "Peace Problems of Today and Yesterday," *The American Political Science Review*, Vol. 38, No. 3, pp. 512-21.
- 《立場B》
- 立場B(1)—
- Brunauer, Esther C. (1941) "Power Politics and Democracy," *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol. 216, pp. 109-16.
- Leith, Charles K. (1938) "Mineral Resources and Peace," *Foreign Affairs*, Vol. 16, No. 3, pp. 515-24.
- Munro, William B. (1933) "Present-Day Forces in European Politics," *The American Scholar*, Vol. 3, No. 2, pp. 187-93.
- Reinsch, Paul S. (1900) *World Politics at the End of the Nineteenth Century*, New York: Macmillan.
- 立場B(2)—
- Becker, Carl (1943) "How New Will the Better World Be?" *Yale Review*, Vol. 32, No. 3, pp. 417-39.
- Gelber, Lionel & Robert K.Gooch (1940) *War for Power and Power for Freedom*, New York: Farrar & Rinehart.
- Lippmann, Walter (1915) *The Stakes of Diplomacy*, New York: Holt.
- (1917) *The Stakes of Diplomacy*, 2nd ed., New York: Holt.
- (1938) "After Geneva: The Defense of the Peace," *The Yale Review*, Vol. 27, No. 4, pp. 649-63.

- (1943) *U.S. Foreign Policy: Shield of the Republic*, Boston: Little, Brown & Company.
- (1944) *U.S. War Aims*, Boston: Little, Brown & Company.
- Schuman, Frederick L. (1940) "War, Peace, and the Balance of Power," *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol. 210, pp. 73-81.
- (1942) *Design for Power: The Struggle for the World*, New York: Alfred A. Knopf.
- (1945) "The Dilemma of the Peace-Seekers," *The American Political Science Review*, Vol. 39, No. 1, pp. 12-30.

《立場C》

- Lasswell, Harold D. (1927) *Propaganda Technique in the World War*, New York: Alfred A. Knopf.
- (1935) *World Politics and Personal Insecurity*, New York: McGraw-Hill.
- (1941) "The Garrison State," *The American Journal of Sociology*, Vol. 46, No. 4, pp. 455-68.

《立場D》

- Beard, Charles A. (1914) *Contemporary American History: 1877-1913*, New York: Macmillan.
- (1934) *The Idea of National Interest: An Analytical Study in American Foreign Policy*, New York: Macmillan.
- (1940) *A Foreign Policy for America*, New York: Alfred A. Knopf.
- & Mary R. Beard (1942) *The American Spirit*, New York: Macmillan. (邦訳、高木八尺・松本重治訳『アメリカ精神の歴史』岩波書店、1954年)
- Beard, Charles A. (1943) *The Republic: Conversations on Fundamentals*, New York: The Viking Press. (邦訳、松本重治訳『アメリカ共和国—アメリカ憲法の基本的精神をめぐって—』みすず書房、1988年)

《立場E》

- Carr, Edward H. (1939) *The Twenty Years' Crisis 1919-1939: An Introduction to the Study of International Relations*, London & New York: Macmillan.
- Friedrich, Carl J. (1938) *Foreign Policy in the Making: The Search for a New Balance of Power*, New York: W.W. Norton.
- Herz, John H. (1942) "Power Politics and World Organization," *The American Political Science Review*, Vol. 36, No. 6, pp. 1039-52.
- Hu Shih [胡適] (1937) "The Changing Balance of Forces in the Pacific," *Foreign Affairs*, Vol. 15, No. 2, pp. 254-9.
- Kirk, Grayson L. (1944) "Postwar Security for the United States," *The American Political Science Review*, Vol. 38, No. 5, pp. 945-55.
- (1945) "The Future Security of the United States," *Proceedings of the Academy of Political Science*, Vol. 21, No. 3, pp. 270-6.
- (1945) "National Power and Foreign Policy," *Foreign Affairs*, Vol. 23, No. 4, pp. 620-6.
- Niebuhr, Reinhold (1940) *Christianity and Power Politics*, New York: Charles Scribner's Sons.
- (1944) *The Children of Light and the Children of Darkness: A Vindication of Democracy and a Critique of Its Traditional Defense*, New York: Charles Scribner's Sons. (邦訳、武田清子訳『光の子と闇の子—キリスト教人間観によるデモクラシー及びマルキシズムの批判—』新教出版社、1948年)
- Sharp, Walter R. & Kirk, Grayson L. (1940) *Contemporary International Relations*, New York: Farrar & Rinehart.

《立場F》

- 立場F(1)—
- Emeny, Brooks (1934) *The Strategy of Raw Materials: A Study of America in Peace and War*, New York: Macmillan.

- (1937) "Raw Materials: Share or Lose?" *The American Scholar*, Vol. 6, No. 4, pp. 421-34.
- (1943) *Mainsprings of World Politics*, New York: Foreign Policy Association.
- Rodgers, William L. (1925) "Can Courts and Tribunals Maintain World Peace?" *Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol. 120, pp. 69-76.
- Simonds, Frank H. (1931) *Can Europe Keep the Peace?* New York & London: Harper & Brothers.
- (1933) *America Faces the Next War*, New York & London: Harper & Brothers.
- (1935) *American Foreign Policy in the Post-War Years*, Baltimore: The Johns Hopkins Press.
- Simonds, Frank H. & Brooks Emeny (1935) *The Great Powers in World Politics: International Relations and Economic Nationalism*, New York: The American Book.
- & ----- (1935) *The Price of Peace: The Challenge of Economic Nationalism*, New York & London: Harper & Brothers.
- Vagts, Alfred (1941) "The United States and the Balance of Power," *The Journal of Politics*, Vol. 41, No. 4, pp. 401-49.
- 立場F(2)—
- Dunn, Frederick S. (1937) *Peaceful Change: A Study of International Procedures*, New York: Council on Foreign Relations.
- Earle, Edward M. (1923) *Turkey, the Great Powers, and the Bagdad Railway: A Study in Imperialism*, New York: Macmillan.
- (1938) "American Military Policy and National Security," *Political Science Quarterly*, Vol. 53, No. 1, pp. 1-13.
- (1940) "National Defense and Political Science," *Political Science Quarterly*, Vol. 55, No. 4, pp. 481-95.
- (1940) "National Security and Foreign Policy," *Yale Review*, Vol. 29, No. 3, pp. 444-60.
- (1940) "Political and Military Strategy for the United States," *Proceedings of the Academy of Political Science*, Vol. 19, No. 2, pp. 112-9.
- (1941) "The Threat to American Security," *Yale Review*, Vol. 30, No. 3, pp. 454-80.
- (1941) "American Security: Its Changing Conditions," *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol. 218, pp. 186-93.
- (1943) "Book Review: Quincy Wright's *A Study of War*," *The American Political Science Review*, Vol. 37, No. 1, pp. 150-3.
- (1943) "Power Politics and American World Policy," *Political Science Quarterly*, Vol. 58, No. 1, pp. 94-106.
- Feis, Herbert (1938) "Raw Materials and Foreign Policy," *Foreign Affairs*, Vol. 16, No. 4, pp. 574-86.
- Fox, William T.R. (1944) *The Super Powers: The United States, Britain, and the Soviet Union: Their Responsibility for Peace*, New York: Harcourt, Brace & Company.
- Sprout, Harold & Margaret Sprout (1939) *The Rise of American Naval Power: 1776-1918*, New Jersey: Princeton University Press.
- & ----- (1940) *Toward a New Order of Sea Power: American Naval Policy and the World Scene: 1918-1922*, New Jersey: Princeton University Press.
- Sprout, Harold (1942) "Book Review: Nicholas J. Spykman's *America's Strategy in World Politics*," *The American Political Science Review*, Vol. 35, No. 5, pp. 956-8.
- (1945) "The Role of the Great States," *Proceedings of the Academy of Political Science*, Vol. 21, No. 3, pp. 284-91.
- & Margaret Sprout, eds. (1945) *Foundations of National Power: Readings on World Politics and American Security*, New Jersey: Princeton University Press.

《立場G》

- Morgenthau, Hans J. (1939) "The Resurrection of Neutrality in Europe," *The American Political Science Review*, Vol. 33, No. 3, pp. 473-86.
- (1942) "Book Review: Georg Schwarzenberger's *Power Politics*," *The American Journal of International Law*, Vol. 36, No. 2, pp. 351-2.
- (1944) "Book Review: Robert M. MacIver's *Towards an Abiding Peace*," *The Journal of Political Economy*, Vol. 52, No. 1, pp. 91-2.
- Spykman, Nicholas J. (1933) "Methods of Approach to the Study of International Relations," *Proceedings of the Fifth Conference of Teachers of International Law and Related Subjects*, Washington: Carnegie Endowment for International Peace, pp. 58-81.
- (1934) "States' Right and the League," *The Yale Review*, Vol. 24, No. 2, pp. 274-92.
- (1938) "Geography and Foreign Policy(1)," *The American Political Science Review*, Vol. 32, No. 1, pp. 28-50.
- (1938) "Geography and Foreign Policy(2)," *The American Political Science Review*, Vol. 32, No. 2, pp. 213-36.
- (1939) "Geographic Objections in Foreign Policy(1)," *The American Political Science Review*, Vol. 33, No. 3, pp. 391-410.
- (1939) "Geographic Objections in Foreign Policy(2)," *The American Political Science Review*, Vol. 33, No. 4, pp. 591-614.
- (1942) *America's Strategy in World Politics: The United States and the Balance of Power*, New York: Harcourt, Brace & Company.
- (1943) "Letters to the Editors: Geopolitics," *Life*, January 11, p. 2.
- (1944) (edited by Helen R. Nicholl) *The Geography of the Peace*, New York: Harcourt, Brace & Company.
- Strausz-Hupé, Robert (1942) *Geopolitics: The Struggle for Space and Power*, New York: G.P. Putnam's Sons.
- (1945) *The Balance of Tomorrow: Power and Foreign Policy in the United States*, New York: G.P. Putnam's Sons.
- Wolfers, Arnold (1940) *Britain and France between Two Wars: Conflicting Strategies of Peace since Versailles*, New York: Harcourt, Brace & Company.
- (1940) "Some Aspects of Foreign Policy," *Yale Review*, Vol. 30, No. 1, pp. 16-33.
- (1942) "Angro-American Post-War Cooperation and the Interests of Europe," *The American Political Science Review*, Vol. 36, No. 4, pp. 656-66.
- (1945) "The Role of the Small States in the Enforcement of International Peace," *Proceedings of the Academy of Political Science*, Vol. 21, No. 3, pp. 292-9.

キーワード：国際政治 戦間期 アメリカ 権力 パワー パワー・ポリティクス
国力 勢力均衡 安全保障 デモクラシー

(Ichinen AKASAKA)